

日本英語教育史学会 会報

306

2021 年 12 月 11 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第285回研究例会報告

2021 (令和 3) 年 11 月 20 日 (土), 第 285 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は述べ 36 名でした。

例会では新企画となる「シリーズ: わたしのしごと」の発表と研究発表が行われました。最初の発表では、河村和也氏 (県立広島大学) が「戦時下の雑誌『語学教育』を読み解く」というタイトルでお話しされました。続いて熊谷允岐氏 (立教大学大学院 [院生]) による「日本における英語語彙学習教材変遷史: 受験用英単語集確立までの道のり」の発表が行われました。司会は馬本勉氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますので、ご参照ください (①は河村氏, ②は熊谷氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

<発表 1 の感想>

◆前回戦時中の『語学教育』をめぐるご発表になられた際の感想に同誌記事の内容をしっかりと読み込まれてとお願いをしましたが、それを実行ください、その上、その成果を拡充した形で『語研だより』に『語学教育』ものがたり」として連載になられているとのことで、うれしく思いました。該誌記事からの引用に解釈・解説を施しながら筆を進めておられ、若い語研会員には興味ある連載となっているのではないのでしょうか。

ゆくゆくは単行本化をお考えとのことですので、その時を楽しみにしております。なお、その際に、想定読者としては若い語研会員に加えて一般の若手英語教員もお考えかと思いますが、この点を考慮すると、引用中の漢字旧字体は現行の字体に改められるほうが読みやすくなるのではないのでしょうか。今回の発表資料に再録いただきました「『語学教育』ものがたり (2)」において、「講習*會」や「愉*快に」に見られるように、JIS 漢字コードには「羽」や「兪」による「習」, 「愉」がないために一々アスタリスクを付しておられるかと思いますが、厳密なことを言うと、例えば「文」の 4 画目は俗にツメと呼ばれる筆押さえの小さな三角が入って「㇏」となり、「分」の 2 画目も横一と右払いからなる「𠂔」の形をとっていて、現行の字体とは異なっていますので、こだわり出すと切りがないように思います。研究論文中の引用における扱いとは分けてお考えいただいはいかがでしょうか。同様に、かなづかいについても、「あつた」のような直音表記や「教へて」などの旧仮名遣い、「いたゞく」などの踊り字も現行の標準的なものに改められ、現代の若い人たちにも読みやすいものにされてはと思います。(Dragon)

- ◆これまで『語学教育』ものがたり」という記事を 2 年半にもかけて執筆されていることを知り、大変驚きました。知の集積ともいべきその資料をこの度は共有していただき、感謝しております。『語学教育』の復刊も進んでいるということで、ますますのご活躍を祈念しております。英語教育史の一旦を学べるという意味において、私もぜひ熟読させていただきます。(ポレポレ)
- ◆戦時下に発行された『語学教育』ではどのようなことが述べられていたのか、大変興味深く聞かせて頂きました。いつか書籍化されたら、ぜひ読ませて頂きたいと思います。(SU 夏美)
- ◆『語学教育』という雑誌の存在を初めて知りました。しかしながら、そんな私でも内容が理解しやすいように簡潔に話されていたので、新しい分野を知ることができた喜びの方が大きかったです。特に日本語を詳しく知らない者が外国語である英語を教えることができるのか、まず日本語の知識をしっかりと得ていることが前提ではないかという厳しめな意見が当時の雑誌に書かれていたというお話が印象に残っています。雑誌の執筆者が毎回同じ方ではなく、立場も様々であったことから多角的な内容が活発に出る雑誌が出来上がったのではないかと思います。(SU 舞香)
- ◆アーカイブという言葉が普段 SNS でよく使うのですがこのような学会でも当たり前に使われていることに驚きました。現在、アーカイブ、歴史の視点を取り入れることに焦点を当てられ、過去の出来事に目を向け現在を考えることの大切さを知りました。戦時下の雑誌語学教育から分かるように出前授業などを多く取り組むべきだと思いました。(SU 真彩)
- ◆初めての「私の仕事」という発表とても面白かったです。『語学教育』を読み解くことや今、世間で話題になっている朝ドラに関しても考察をいただけて様々まことを学びました。(MGU 瑞帆)
- ◆自身の研究関連で、1943 年頃の『語学教育』を大学図書館所蔵のもので読んでおりました。当時の文献の内容の解釈の方法に頭を抱えたのを思い出しました。戦時下の困難な時こそ、体力を温存し次への飛躍のために思考をめぐらされた内容、あるいは淡々と英語教授研究所からの業績の継承に尽力されていると思われる内容もあり、興味深いと思っていました。当時の他雑誌なども同様の傾向だったことを思い出しておりました。(HN)
- ◆語研と『語学教育』の全体像を示す年表と総目次を含む資料は圧巻でした。そして河村先生が『語学教育』ものがたり」を楽しく執筆しておられる様子がとてもよく伝わってきました。人、書物、そして学校に向けられる先生の温かい眼差しが、英語教育史の豊かな語りの源だと感じます。「ものがたり」をより深く味わうために、『語学教育』の復刻を心待ちにしています。(HB)
- ◆河村先生は文章が上手なので、長期連載中の「語学教育ものがたり」は学問的な内容の豊かさもさることながら、読み物としても実に面白いです。雑誌『語学教育』は戦中・戦後を通じて連続的に刊行された外国語教育雑誌ですから、ぜひ多方面からの研究が望まれます。そのためにも、2023 年の語研 100 周年を記念して、『語学教育』を完全復刻したいですね。(みかん舟)

<発表 2 の感想>

- ◆学位論文を要約されてのご発表でしたが、語彙学習教材(単語集)を体系的・包括的に取り上げて分析のご研究で、大いなる関心を覚えました。辞書史の研究は幅広く行われているものの、この領域については断片的な研究はあっても、それを歴史的に系統化して捉えようとする研究はこれまでになく、それだけに開拓者精神をもって資料の収集から分析、系統化に臨まれたと思われ、ぜひこれを公刊されることを願うところです。なお、その際に、できれば戦時期までの昭和前期をもスコープに入れていただくと、副題とされた「受験用英単語集」の確立という概念がいつそう明確になるように思いおります。ただ、戦後を含めるとなると、どの時代までを対象とするか難しいと

ころです。

なお、ご発表をうかがっていて、やはり辞書と単語集との間にはどこに、どのような形で界線を引くことができるのかについて、自分の中でもすっきりした答えが得られませんでした。例えば、明治4年、吉田庸徳の手によって編まれた『袖珍英和節用 [集]』——「英和」とあるが和英辞典——は辞書史の年表にも掲出されるものながら、その「序」には収録語数を「僅かに数千辞」としつつ、「初学の輩坐右に置き晨昕これを熟読せば漸く彼の国語に通じ洋学の一斑を知るに至らは思ひ半に過る事あらん」と述べられていて、ご発表中の「本研究における単語集」の条件に照らすと、

「語彙を検索するもの」でありながら、「語彙を記憶すること」をも目的としております。該書は今回の分析対象に含まれているのでしょうか、それとも除外されているのでしょうか。(Dragon)

◆江戸時代から大正時代までに編纂された単語集について、その調査・結果・考察までを非常にわかりやすく簡潔にまとめられて、素晴らしいと思いました。膨大な量の調査をされてきたことが伝わってきました。単語集について私も興味があり、大変楽しく聞かせて頂きました。(SU 夏美)

◆外国語を学ぶ上で誰もが1度は使うであろう単語集ですが、歴史や変遷史という視点でそれを考えたことがありませんでしたので、新鮮で面白かったです。限られた紙面の中でどうやってのせるのか、どのくらいのせるのかという創意工夫から、各時代の背景や読者・学習者が求めていたものが感じ取れるような気がしました。明治時代の単語集には、視覚的に意味を理解できるように図解がついていましたが、その絵が可愛いイラストではなく、かなり写實的に描かれている点からも、その読者層・学習者層が想像できそうです。また、厳密には英単語に対応する日本語がないときに、似ているもので代用している点も興味深かったです。しかし、代用品で覚えてしまったら実際には英単語の使い方を誤ってトラブルになってしまうのではないかととも思いますが...(SU 舞香)

◆発表の仕方や質問への答え方から研究の年月と努力の結果だと考えました。単語集について考える機会はこれまで1度もなかったのですが時代別に分けて比較し良い点や悪い点などが分かり面白かったです。それらの工夫や改善がこれからも更に続けばいいなと思いました。(SU 真彩)

◆単語集と聞きますと、単なる英語学習の手段・道具としての認識しかしていなかったのが研究対象にもなり得るということが驚きでした。明治期に編纂された単語集が計146冊もあることから、それほど語彙学習が明治期から活発だったことにも驚かされました。(SU アンドレッセン)

◆単語帳は自分も学生時代に使用していました。その歴史的な変遷と使用目的についてとても興味深い考察でした。単語集と単語帳の区別なども学ことができました。(MGU 瑞帆)

◆不勉強で的外れでしたらお許しいただきたいのですが、以下の点に思いを巡らしながら拝聴しておりました。当時のお雇い外国人が明治期に自身の経験も含め英語話者用に作成した日本語学習用教材にあるいわゆる単語集の部分などは、日本人が作成した英語の単語集と何か違いがあるのかなあ...と。(HN)

◆膨大な単語集を分類・分析した大変厚みのある研究成果をうかがい感銘を覚えました。単語集の存在は、それこそ人がことばを学ぶことの本質を表しているように思います。今なお、様々な変遷を遂げ続ける単語集についても研究を重ねられ、幕末明治期と今とをつなぐ単語集研究の集大成を期待しています。(HB)

◆まずは熊谷先生が英単語集の歴史的研究で博士号を取得されたことを心よりお慶び申し上げます。例会発表を拝聴した限りでも、たいへん緻密なご研究ですので、ぜひ出版されるといいですね。今後益々のご研究を大いに期待しております。(みかん舟)

＜会全体に関する感想＞

◆オンラインの開催が続いていますが、懇親会を開いていただくことで、先生方とお話する機会が増え、大変感謝しております。オンラインか対面かに関わらず、引き続き皆様方からたくさん勉強させていただければ幸いです。(ポレポレ)

◆Zoom 例会もだんだんと慣れてきて、**digitally illiterate** と呼ばれかねない老体にもその利点に分かってはきましたが、例会終了後に対面形式では感じる事のない妙な疲れが残るのはなぜでしょう。皆さんはいかがでしょう。まだ Zoom に慣れきっていないということなのか、あるいは、**digital illiteracy** の一症状なのか、とにかくコロナ禍の収束を祈るばかりです。(Dragon)

◆何度も資料を送って頂き有難うございました。次回の例会も楽しみにしています！(SU 夏美)

◆オンラインの会では雰囲気づくりがとても難しいので、先に穏やかに雑談されている先生方がいらっしゃったおかげで、誰でも受け入れるような親しみのある空気があったので、学生の私も入室してホッとしました。全員がカメラをオフにしてシーンと静寂が流れているよりは、カメラを点けて楽しそうにお話している様子が見られた方が参加者に安心感があります。質問やコメントで手を挙げる先生方がたくさんいらっしゃったのも、河村様と熊谷様の講義が興味深かったのに加えて、序盤の誰でも発言を許されるような雰囲気づくりが効いていたからだと思います。(SU 舞香)

◆先生方のお話ややり取りから活発な例会となっていたと思います。学生にとっても興味深いものや、もちろん知らないことも含めて新たな気づきがありました。質疑応答では予想もしていなかったような質問などがありました。やはり視点が全く違うと実感しました。それに対する回答なども意見だけではなく調べた事柄から論理的に答えられていました。私もそのように論理的に話せるようになりたいです。(SU 真彩)

◆今回もオンラインでのスムーズな講演でした。参加の際はよろしくお願いします。(MGU 瑞帆)

◆お世話になり、ありがとうございます。リモート例会感謝しております。私の諸事情で以前のように直接会場へ足を運ぶのが難しいことがあり、欠席させていただくことが多かったのです。しかし、リモート例会のおかげで、時間が許せば、拝聴できますこと、有難く思います。いろいろ勉強させていただけることに感謝しております。(HN)

◆オンライン例会がすっかり手慣れてきました。それを喜ぶ一方で、やはり直接お目に掛かり、研究交流と懇親を深めたいと願っております。なお、NHK の連続テレビ小説「カムカム エヴリバディ」で戦中・戦後の英語教育史への感心が高まっていますので、私たちの例会や大会で関連企画を用意するのも一考かと思います。「赤ちゃんのように口まねで」といったナチュラル・メソッドの是非（論争は明治からあります）、占領政策と外国語教育との関係など、突っ込みどころ満載です。(みかん舟)

発表を終えて

河村 和也 (県立広島大学)

語学教育研究所には、学生時代に会員となって以来、研究生・研究員・評議員として関わって来ました。同研究所は再来年、すなわち 2023 年に創立 100 周年を迎えますが、わたしの会員歴がすでにそのあゆみの三分の一を超えているという事実に驚かされます。

今回お話しした「わたしのしごと」は、研究所がアジア・太平洋戦争下に刊行を開始した雑誌『語学教育』の内容を会員向け広報紙への連載を通じて紹介するというものです。そもそも、研究所

の歴史を振り返る活動を組織化できなかったことへの不満や「罪滅ぼし」の思いもあって始めさせてもらったもので、100周年を祝う意識の醸成にわずかでも繋がるならばと思う程度のものでした。

しかし、回を重ねるうちに、この「しごと」をわたしが続けることの意味をはっきりとわかって来ました。わたしは、英語教育史に関わろうとした当初から「戦時下の語学教員はどのように生きたのか」というテーマを温めていたのですが、この「しごと」こそが、そのテーマを具体化するものであると気付いたのです。

そして、書き進めるうちに、この「しごと」は学術論文ではなく一般書が似合うと、しみじみ思うようになりました。雑誌『語学教育』は全巻の復刻が予定されていますので、それに華を添える一冊をまとめることができると願っています。

今回、このような「わたしの」しごとについてお話しさせていただく機会をお与えくださりありがとうございました。また、質疑応答の時間には数々のコメントを頂戴しましたこと、心よりお礼申し上げます。

発表を終えて

熊谷 允岐 (立教大学大学院 [院生])

第285回研究例会では、大変お世話になりましたことを心より御礼申し上げます。本発表では、日本における英単語集がどのように生まれ、編纂が続けられたのか。そこに日本人の語彙学習にたいするどのような創意工夫が見られたのか。そして、われわれに馴染みがあるとされる受験単語集の編纂にどのように繋がっていったのかについて、大変に足早にはではありませんでしたが説明させていただきました。

研究を行う中で強く感じたのは、必ずしも質の高い単語集が大きな影響力を持ったり、多くの日本人に受け入れられたりしたわけではないという点です。学習のための創意工夫が凝らされているかに関わらず、現代でいうところの「ネームバリュー」によってその影響力を拡大させた単語集もあったようです。そのような教材こそが、日本における英語語彙学習の一端を支え、日本人の間に普及をもたらしたことは言うまでもなく、決して軽視されるべきものではありません。ただ同時に、光が当たらない中にも、質の高い教材というものは未だ多く残っているとわたしは考えています。単語集の歴史をより正確に理解するために、今後はそのような資料も探し、保存し、調査を行なっていきたいと考えています。

最後になりますが、ご参加の皆様方より有意義なご質問、ご意見をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。本発表で学んだ点を踏まえ、今後も研究に励ませていただきます。

)) 新入会員

- ◆ 松久保 暁子 (まつくぼ あきこ) 東京都 桜美林大学

)) 英語教育史フォルダ

- ◆ 若林俊輔 (著)、若有保彦 (編) 『若林俊輔先生著作集④: 語法・文法指導, 辞書指導, 英文和訳講評他』が一般財団法人語学教育研究所より刊行された。定価は1,200円 (税込)。本書は語学教育研究所の次の URL から注文が可能。送料は1冊につき200円。

http://www.irlt.or.jp/modules/liaise/index.php?form_id=12

)) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 286 回研究例会 2022 年 1 月 8 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 287 回研究例会 2022 年 3 月 19 日 (土) オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (7 月発表希望であれば 4 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 286 回 研究例会

日時：2022 年 1 月 8 日 (土) 14:00~17:00 オンライン開催

*申込方法は学会ウェブサイト内の「オンラインによる研究例会 参加方法」をご参照下さい。

研究発表

「若林俊輔の英語教育論：終期（東京外国語大学退官後）の特徴」

若有 保彦（秋田大学）

【概要】本研究は「若林俊輔の英語教育論」の全体像及びその発展の過程を明らかにすることを目的としている。今回の発表では、若林が 1993 年 3 月に東京外国語大学を退官した後の時代を「終期」と定義し、この時期の論考、紙上討議やインタビューにおける発言を分析した結果を報告する。

研究発表

「臨時教員養成所卒業生の国家としての評価—他機関卒業生と比較して」

鈴木 聡（鳥羽商船高等専門学校）

【概要】臨時教員養成所は設置期間が短いため具体的な資料に乏しく、やや偏った視点で受け取られがちである。赴任先においても高等師範卒業生が充足できない新設の中学校や高等女学校の供給先と考えられている。しかし、それはどこまで真実なのか。本例会では、筆者の祖父を含む臨時教員養成所卒業生に対する国の評価と他機関の卒業生の経歴を参照しながら考察していく次第である。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 新型コロナウイルスの感染状況が、前号発行時からさらに落ち着きました。一方、オミクロン株が出現したことで、やはり次号の発行時にどうなっているかの想像がつかえません。いずれにしても一日も早い終息を願うばかりです。(若)